

持統御製歌の考察

——卷一・二八番歌について——

はじめに

持統天皇は、万葉集に六首の詠歌を残している。卷二に収められた天武崩御に関する四首は、一五九番が殯宮での長歌、一六〇・一六一番が祭事での短歌二首、そして一六二番が持統七年の御齋会での長歌である。これらの挽歌四首は、藤原京への遷都が持統八年であるところから飛鳥の地で作歌されたことになる。卷三・二三六番は、志斐姫に与えた歌で、次に配列された長忌寸意吉麻呂の作（二三八）が慶雲三年の折とも考えられる成立であることから、また歌の含み持つ諸諺からも藤原京での作とも考えられる。

さて、卷一・二八番歌の、

春すぎて夏来るらし白妙の衣乾したり天の香具山

森

斌

とうたわれた一首の成立時期はいつ頃であろうか。

歌の示す明朗な調べからは、三代十六年の京師で政情も安定していた藤原京時代の作に相応しい。一方卷一の配列では、この持統歌の後に「藤原宮の役民」（五〇）「藤原宮の御井」（五一・五三）の歌もあって、明日香浄見原宮での詠とも考えられる。しかし、卷一の配列が年月の順序に矛盾している箇所もあり、軽皇子を立太子させ、さらに讓位した藤原京で作歌されていると考えてよいのであるまいか。志斐姫に与えた一首とこの香具山の歌とは、藤原京に遷都以後の詠であろう。特に香具山の歌は、季節感を明朗な調べで表現していて、新古今にも収められている如く昔から変わらない高い評価を受けてきている。

持統天皇の香具山歌は、これ迄の理解に再考すべき余地がないであろうか。新宮殿での生活に基づく季節感と明確

で紛れがないと思われる意味などに、はたして疑問がないのであろうか。

一、季節歌

豊かな自然に包まれて生活していた万葉時代の人にとつて、身近に姿を見せる動物、そして折々にとりどりの色彩を競う花などは、季節を象徴する存在であった。巻八と巻十の二巻は、春夏秋冬による分類が雑歌や相聞という部立に優先している。人名の知られる巻八の季節歌では、初期・白鳳期の歌人がうたう歌を冒頭部に配し、夏雑歌が藤原夫人に始まっている。

霍公鳥いたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くま
でに（一四六五）

「五月の玉」は薬玉とも橘の実とも言われているが、橘とすれば夏を代表する霍公鳥と橘の組合せが詠まれた初出の歌である。白鳳期のものとして志貴皇子歌（一四六六）、弓削皇子歌（一四六七）があるが、それは霍公鳥をうたうことから夏の季節歌に選ばれているにすぎない。夏相聞の部には、白鳳期の歌が見られない。巻十の夏雑歌に古歌として二首（一九三七・一九三八）が見出されるが、霍公鳥がうたわれていることから季節歌に選ばれているにすぎない。

い。従って、持統の香具山歌は、白鳳時代のものでありながら、霍公鳥や橘などの動植物によらないで季節感をうたうところに特徴がある。

さて、香具山の一首は、「らし」が用いられていた。「らし」とは、客観的に確められた事柄を、その事柄が何故であるのかを推量する場合に用いられる助動詞である。とすれば、白妙の衣が乾されている事柄を見て、このことが「春過ぎて夏来る」と推量したことになる。この「らし」の特徴を用いた季節歌は、万葉集で伝統となり、類型というべきものが存在している。とりわけ巻十に多く見出される。そこで、類型の歌を示せば次の如くである。

春

梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来るらし（五・八三四 田氏肥人）

うちなびく春来るらし山の際の遠き木末の咲き行く見れば（八・一四二二 尾張連）

ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく春立つらしも（十・一八一二）

古の人の植えけむ杉が枝に霞たなびく春は来ぬらし（十・一八一四）

春過ぎて春来るらし朝日さす春日の山に霞たなびく

(十・一八四四)

鶯の春になるらし春日山霞たなびく夜目に見れども

(十・一八四五)

うちなびく春さり来らし山の際の遠き木末の咲き行く

見れば(十・一八六五 一四二二の異伝)

春日野に煙立つ見ゆ少女らし春野のうはき採みて煮ら

しも(十・一八七九)

白雪の常敷く冬は過ぎにけらしも春霞たなびく野辺の

鶯鳴くも(十・一八八八)

み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春へは明日しあるら

し(二〇・四四八八 三形王)

夏

野辺見れば撫子の花咲きにけりわが待つ秋は近づくら

しも(十・一九七二)

秋

黄葉する時になるらし月人の楓の枝の色づくみれば

(十・二二〇二)

妹が手を取石の池の波の間ゆ鳥が音異に鳴く秋過ぎぬ

らし(十・二二六六)

引用した以上の歌と香具山の歌を加えて、全十四首中

(重出歌を含む)で春をうたうもの十首、夏と秋をそれぞ

れうたうもの各二首が参考になる。しかも「らし」という助動詞の特徴が初春、初夏・晩夏、初秋・晩秋というそれぞれの到来をうたわせるのであろうが、それらの季節を感じさせるよすがに、それぞれの季節を象徴する動植物と景物とが提示されている。動植物として「梅の花」「木末の咲き行く(桜)」「鶯」「撫子の花」「楓の枝の色づく(黄葉)」「鳥が音」が登場している。一方景物として「霞」「煙」が採り上げられている。春と秋とはその季節を代表する動植物や景物が常に比較される程に豊かでありながら、何故か秋の到来をうたう例歌が一首だけである。秋の到来は待ち望む対象にならなかったのであろうか。

ところで引用歌でまず注目されるのは、三形王の作である。天平宝字元年十二月十八日にうたわれているのであるが、四四八八番は十二月中に立春を迎えての詠作とも考えられ、古今集の一番歌を連想させる。勿論「み雪」「鶯」などの冬と春を代表するものがあって、その点古今の巻頭歌が暦の上だけで立春をうたっていることと異なりを見せている。

次に一八七九番が注目される。春日野が登場していて平城京に遷都してからの作品と思われるが、煙の立ち登る景から春の野遊びを連想した一首である。若葉をつみ、羹に

して食するので、そのために春日野に煙が立つ。季節に伴う自然の変化を具体的に提示して、そこから四季を推量する他の歌と異質である。即ち、春の野遊びという人為的な営みから生じる景であって、自然的な現象でない。この人為的な営みによる景から季節を推量しているのは、持統天皇の歌とこの一八七九番の二首である。

さて、春の到来をうたう歌に比較して、何故か秋の到来をうたう歌が少なかった。ちなみに、春の風物がことさらに豊かだったわけではなく、秋も同様な特徴を見せている。雁、鹿、萩、黄葉は、いうに及ばず、月、七夕なども歌の素材になっている。どうして夏から秋への季節に注目しなかったのであろう。

夏の季節歌でありながら一九七二番が「わが待つ秋」とうたっている。秋は待ち望まれた季節である。しかし、万葉集にも「秋風」という言葉があるが、古今集などの「風の音」「川風」「秋のはつかせ」などを思いつかせる趣は、こまやかすぎて誕生していない。やはり晩夏から初秋への推移が冬から春への到来ほど明確なものでない点にも、それは原因するのであろう。

持統紀四年十一月の条に、はじめて元嘉暦儀鳳暦が用いられたという記述がある。時を同じくして「春べは花かざ

し持ち 秋たてば黄葉かざせり」(一・三八)と人麻呂が春秋を対比させて表現している。春と秋とが和歌で本格的に比較され始めて来る。しかし、「春愁秋思」の歌は例外であり、むしろ賞美することが興趣の対象になっている。

額田王が「そこし恨めし 秋山われは」(一・一六)とうたいながら、秋の季節歌は賞美の内容である。一方、春の季節歌も家持を除き、国見、歌垣、野遊びなどの予祝儀礼が行われる季節であり、賞で喜ぶ内容である。

極寒の冬を過ごす人々にとって、好季である春の到来は待ち遠しいものである。また冬と同様に夏もそれなりに厳しく苦勞する季節である。「夏草の思ひ萎えて」(二・一三一)という日差しは、「六月の地さへ割けて」(十・一九九五)という状態であり、人々は「夏瘦」(十六・三八五三)に苦しむ。まさしく興趣などの生じにくい生活を余儀無くされる。夏の季節歌は、特定の動植物がうたわれるだけであって、季節そのものが賞美の対象になるのでない。ところが、持統天皇は夏の到来を確信し、その喜びまでも歌に表現させている。万葉時代の人々は、秋のおとずれを持ち続けて、夏を耐えながら過したはずである。どうして初夏の到来を喜ぶのであろうか。霍公鳥が鳴き、橘が咲く喜びをうたうことと、夏の到来の歓喜をうたうこととは、質が

全く異なる。その意味でも特殊な内容をうたうのが持統歌である。

ここで巻八と巻十の夏の季節歌を考慮してみたい。巻八の夏雑歌は、藤原夫人、志貴皇子、弓削皇子の歌が順に載せられている。夏相聞の部は、第一期と第二期と呼ばれる歌がなく、大伴坂上郎女の歌に始まる。夏部四六首中で白鳳万葉に属するのは三首だけであって、いずれも霍公鳥を題材にしていることから夏部の範疇にふくまれることになったらしい。また、夏の季節歌の素材としては、霍公鳥が三三首、橘が一三首、百合と撫子がそれぞれ二首であり、この巻八の傾向は巻十の夏部にも同様な結果になる。但し、卯の花が巻十で九首にうたわれていて、橘に次いでいる。

巻十の夏部は五四首を教えるが、冒頭の長歌と反歌が古歌集を出典としている以外、他の歌は新しい。さらに特徴としては、人麻呂歌集の歌が一首も含まれないことである。春秋冬の季節歌が人麻呂歌集を出典とするものを含むのであるから、夏の季節歌はその意味で特殊な性格を見せていることになる。

巻八と巻十の夏部に収められた歌で四季の折目に視点をあててうたうのは、巻十・一九七二番があるだけである。

一首の内容は、野辺に咲く撫子を見て秋の近づいている事を知るものである。撫子は秋の七種にもなっていて、秋野に早く咲き出し、夏から秋への移ろいを知らせる。しかし、下句が「わが待つ秋は近づくらしも」とあって、夏から秋へという季節の推移というより、季節の折目に視点をあてた範囲に止まっている。その点春から夏の到来までを捉えて表現した香具山の歌は、他に類想歌を見出し難い。

夏の物色が特別に貧しかったと思えない。しかし、持統天皇は、自然の運行や物色の変化に伴う季節を、衣を乾すという人為的なものを感じ、さらに移ろうという動的に季節を捉えた表現を試みている。ここに到れば創作年代として古い季節歌というばかりか、夏の季節の捉え方にも極めて特異な内容を含みもつことが知られる。しかも、「らし」を用いる季節歌が伝統となりながら、持統歌に類想するものが誕生しなかった。春から夏の推移をうたう極めて特殊な内容と特異な素材による表現は、類型が生まれるすべがなかったのかも知れない。

以上、季節歌としての特徴を考えて来たのであるが、その見方に対して批評的な見解も存在している。そこで香具山の歌の理解に対する疑問を、次節では考察したい。

二、香具山歌の問題

持統御製歌二八番について、これ迄の理解に一石を投じる疑問と享受を示したのは、大浜巖比古氏と中西進博士である。⁽¹⁾しかし、万葉集全注の著者である伊藤博博士は、それらに言及することなく、この香具山の歌を写實的な季節歌として評価している。⁽²⁾天降った聖なる香具山の風物の変化に、夏の到来を確信して、大和にそして日本に夏が訪れた歓喜を宣言したもので、「白妙の衣」を聖なる山を齋き祭る齋衣と考え、伊藤博士は晩春から初夏をむかえたときに詠まれたとする。かく理解を示される根本には、神聖な香具山に衣を乾すことの疑問もあって、白い衣が山を齋き祭る人の齋衣と考えるなど、折口信夫博士の説も踏まえている。⁽³⁾

香具山は、「天」が冠せられる神聖な山であり、万葉時代に人家があるはずもない。また山には樹木が繁茂した原生林に被われていたはずである。その山の何処に衣を乾すのであろうか。衣を山ごもりする処女たちが乾すとして、持統天皇が藤原京から、或いは飛鳥浄見原宮とすればさらに香具山が遠いのであるが、はたして数多く目立つ衣であつても見出し得るであらうか。

持統天皇の香具山歌は、研究史的に見ても生活に基づく季節感を考えるのが一般的である。戸谷高明氏は、白い衣を「齋衣」とする説もあるがとして、大方は村人の乾した白衣と考えているとして、初夏の生活風景を季節の美としてうたう点に、この歌の新しさがある、という判断を示している。⁽⁴⁾

日常の生活風景として香具山に衣が乾すことが理解し難いのであるが、一步譲って聖地で衣を乾すことがあるにせよ、藤原京から香具山が見えていることと、その山に衣が乾してある景を確認出来ることとは同質の事柄でない。即ち、人間の持つ視力では、衣を乾す山の景が認識できる程の距離にあったと思えないのである。とすれば、「衣乾したり天の香具山」とは、日常生活的な、或いは写實的な内容で考えるべきでなく、もっと別の視点からの考察を試みるべきであらう。

大浜巖比古氏は、この香具山の歌を四時思想をうたうのであり、天皇即位を確認した宣言とする新しい視点からの解釈を開陳した。⁽⁵⁾

春過ぎて夏來たるらし白たへの衣干したり天の香具山
(春) (夏) (秋) (天) (冬) (地)
歌の右に記した(一)と(二)に春夏秋冬と天地をそれぞれ示したが、四時順行と天地をも含めてうたわれたのが

持統歌だとする。四時とは、天帝がみずからの意志で移しかえる季節をいう。古代中国で超越的な支配者である天帝が四季を支配し、そして移しかえて定める思想のあったことから、立春、立夏、立秋、そして立冬などの言葉も生まれた。大浜氏は、見かけが春から夏への推移がうたわれている、その四時観が認められるのであって、季節歌というより帝位確認の宣言歌として捉えている。

坂本信幸氏は、大浜氏の新解釈に触れて、アララギ風の素朴な万葉観がなお強い現在、読み過ぎとの評がまぬがれないだろう、という解説を試みている。⁽⁶⁾歌に寓意を認めることは、読み過ぎになるわけでないが、何故に直接的に四時観をうたい天皇即位の宣言としなかったのであろうか。むしろ、四時観をうたうことが主題であるなら、わざわざ寓意に込めている点に一つの疑問をもつ。もう一つの疑問は、天皇に即位する、或いは即位したことの確認を歌で宣るということが考えられるのか、という事柄である。

人麻呂を代表とする天皇讃美の歌、或は讃仰ということが行われているにせよ、天子みずからがそれらの歌を作ることは、考えられない。讃仰を主題とする歌は、宮廷の歌人や官人がうたったものである。大浜氏の考察は、日常生活に基づく写実や季節感といった伝統的な解釈を否定した

ものであり、そこに賛同するが、今後とも批評され、継承すべきものであろう。即ち、問題とすべきは、その寓意ともいふべき内容にあるのであるまいか。

「衣を乾す」という表現を、生活する民衆のものとして理解しようとする限り、「斎衣」などと考える想像も一方で行なわれるであらうし、その当否も決定的なものにならないであらう。むしろ、全く質の異なる視点から、新しい何らかの「衣」を考慮すべきであるまいか。衣を乾すことが実景として理解する限り、この香具山歌の本質は明確にならないであらう。「衣を乾したり」ということは、やはり何らかの寓意が込められているのであるまいか。

そこで次節では衣を乾す行為がどういう意味で使用されているか、万葉集の全用例を考察してみたい。

三、衣乾したり

万葉集では「衣」と同一の意味で「布」を用いる場合もある。従って、衣を乾すことは布を干すことも含めて考えるのが適當である。ちなみに万葉集中で布や衣を乾すことがうたわれている歌は、これ迄の考察対象である持統歌を加え、長歌一首と短歌七首を数えることが出来る。

……あらたまの 年経るまでに 白袴の衣も干さず

朝夕に ありつる君は……(三・四四三 大伴三中)

照らす日を闇に見なして泣く涙衣濡らしつ干す人無し
に(四・六九〇 大伴三依)

漁する海未通女らの袖とおり濡れにし衣干せど乾かず
(七・一一八六)

朝霧に濡れにし衣干さずして独りか君が山道越ゆらむ
(九・一六六六)

炙り干す人もあれやも濡衣を家には遣らな旅のしるし
に(九・一六八八)

三川の淵瀬もおちず小網さすに衣手濡れぬ干す児は無
しに(九・一七一一 春日藏首老)

筑波嶺に雪かも降らる否をかなしき児ろが布乾さ
るかも(十四・三三五一)

右に引用した歌と持統歌を合わせ、八首に布と衣を乾すことがうたわれている。まず唯一の長歌(四四三)では、自経した丈部龍麻呂を讃えるために「衣を干さず」と作者が表現した。この「衣を干さず」とは、天皇の命令をかしこみ、幾年もの間露や汗にぬれた衣を脱いで干すことがない」と述べ、官吏として懸命に働き続けたことをかく表現したのである。大伴三中が挽歌をものするとき、丈部龍麻呂を讃えるために用いた表現である。

他の引用歌六首は、全てが短歌であり、また雑歌(一一八六、一六六六、一六八八、一七一一)、相聞歌(六九〇)、そして東歌(三三五一)が都に伝誦された風俗歌とする巻頭群の一首である。まず相聞歌の六九〇番は、大伴三依から去っていった女性を「干す人」と寓意に込めて表現している。この「衣・布」を干す人が女性を示し、女性の愛情表現であったことは、雑歌に於いても等しい。一一八六番は、「漁する海未通女らの」と自分をかく見立てているが、衣を乾す行為が女性の愛情を示すものであったから生まれる表現である。一六六六番と一六八八番の二首は、旅をしている男性が家に残っている愛しい女性の心情を衣を乾す姿に求めている。この故郷に居る女性の愛情を衣を乾す行為に託そうとするのは、

炙り干す人もあれやも家人の春雨すらを間使にする
(九・一六九八)

とある「炙り干す人」も同様で、衣を乾すことが直接に表現されていないだけである。最後に引用した東歌の例は、布を乾す女性を「かなしき児ろ」としていて、特にわかりやすい。以上、挽歌の例が仕事する官吏への讃美に用いられているものを除き、相聞歌と雑歌の用例は「かなしき児」が「衣・布」を乾すのである。

持統歌の例を除き、衣や布を乾すことは、直接その行為を表現したというだけに止まらない。即ち、事実として表現しているのではなく、必ず何らかの讚美や愛情といった内容の裏付けが「衣を乾す」行為に求められている。持統天皇の香具山歌だけが、日常の生活風景を描写するに止まるのであろうか。そこには愛情表現が寓意されているのであるまいか。

ちなみに筑波嶺に布を乾す愛しい女性がうたわれた東歌と持統の香具山歌の二首を同質のものとして考察したのは、中西博士である。⁽⁷⁾中西博士は、さらに風俗歌(二二)、播磨国風土記の飾磨の郡にある記述、古今集の旋頭歌(十九・一〇〇七、一〇〇八)なども考察の参考に加えている。

風俗歌(二二)

甲斐が嶺に 白きは雪かや いなをさの

甲斐の褰衣や 晒す手作りや 晒す手作り

播磨国風土記・飾磨の郡小川里

高瀬と称ふ所以は、品太の天皇、夢の前の丘に登りて望見し給ひしかば、北の方に白き色の物ありき。「彼は何の物ぞも」と宣り給ひて、やがて舍人上野の国の麻奈毗古を遣りて察しめ給ひき。申しけらく、「高き処より流れ落つる水なり」と申しき。すなわち高瀬の

村と号く。

古今集(十九・一〇〇七、一〇〇八)

題しらず よみ人しらず

うちわたす をち方人に 物まをすわれ そのそこに
白く咲けるは 何の花ぞも

返し

春されば 野辺にまづ咲く 見れどあかぬ花 まひなしに ただ名のるべき 花の名なれや

引用した風俗歌は、山の雪か、白い褰衣かという東歌と同想の内容である。播磨国風土記の記述は、応神天皇が丘の白い物を見てそれを何かと問えば、舍人が出掛けて行って滝であると答え、それを高瀬の地名起源に結びつけている。古今集の旋頭歌は、白い花を何かと問い、お礼もないのに名告れないと答える、という求婚の問答である。白い花とは梅花のことであるが、それを擬人化している。以上の如く見て来るとき、中西博士の指摘する「(山の) 白い物は何か」という問い、それを契機とした想の展開は充分考えられ、持統歌にも適用できる。即ち、単純な季節歌であること否定するもので、香具山の歌が冬の雪降る景を見て、今冬だと思っていたのに、冬どころかも春も過ぎて白い衣を乾す夏に、なっただけらしい、と中西博士は説明され

ている。

しかし、この説明では「春過ぎて夏来るらし」とかくあたりまえのことを二句も用いて表現する理由が理解できない。春と夏の景の対照があつて誕生する表現であつて、そこに冬までもが何故に加わるのであろうか。筑波嶺の東歌も甲斐が嶺の風俗歌も、そこには季節感がない。あるのは対立する二つの白いものである。「山の白い物は何か」という問いがあつて、それを「雪」である、否「白い布」であると答えるのが東歌であり、風俗歌である。ところが、香具山の歌は、「山の白い物は何か」と問う類型でありながら、春と夏の季節に関わる「白い物」の対照を無視できないのであるまいか。

ところで、万葉集中で香具山歌の「春過ぎて夏来るらし」に最も類似した表現は、「冬過ぎて春来るらし」（一八四四）である。この一八四四番の下句は「朝日さす春日の山に霞たなびく」とあつて、春の代表的な景である霞がうたわれている。とすれば「白妙の衣乾したり天の香具山」も夏の景ということになりそうであるが、「衣を乾す」とが夏に限定し得ないのであるから、「白妙」が夏を連想させるのであろうか。

夏の季節歌でよく用いられている素材は、動植物であ

る。特に霍公鳥と橘が代表である。卷十の秋雑歌に収められた一首には、

春は萌え夏は緑に紅の緑色に見せる秋の山かも（二一七七）

とあつて、夏山の色の特徵に用いられたにせよ、「夏は緑」とある。「夏草」という言葉もあるから、夏の色が草木の葉色で示されるのであろう。夏の特徴を一首に凝縮してうたうのは、家持の歌に見出される。

春過ぎて 夏来向へば あしひきの 山呼び響め さ
夜中に 鳴く霍公鳥 初音を 聞けばなつかし 菖蒲
花橘を 貫き交え 繚くまでに 里響め 鳴き渡れ
ども 猶ししのはゆ（十九・四一八〇）

霍公鳥の初音を立夏の証とした大伴家持であるが、菖蒲や花橘までも登場させたため、初夏の趣をむしろ感じさせなくなつて、春から夏の到来を歌う主題がぼけてしまつてゐる。ちなみに冬から春の訪れをうたうのは、志貴皇子歌（八・一四一八）に代表されるし、用例とすべき歌も多い。ところが、春から夏の訪れをうたう歌は、持統歌（二八）を除き指摘するのが難しい。さらに夏を動植物によらない風景で示そうとすれば、「六月の地さへ割けて」（一九九五）とある日差しに注目する程度で、「衣更」や「夏衣」

の言葉も万葉集時代にはないのである。まずは白い衣、乃至それに類似する表現を採り上げてみたい。

かにかくに人はいふとも織り継がむわが機物の白き麻衣（七・一二九八）

わがために織女のその屋戸に織る白栲は織りてけむかも（十・二〇二七）

君に逢はず久しき時ゆ織る服の白栲衣垢づくまでに（十・二〇二八）

わが背子が白細衣行き触ればにほひぬべくもみつ山かも（十・二一九二）

右四首が参考になる歌である。第一首目は、譬喩歌に収められていて、「寄衣」と題する三首中の一首である。「織り継がむ」が恋を続ける譬喩で、「白き麻衣」を女性が織っている。第二首目と第三首目の歌は、七夕の歌であるが、「白栲」「白栲衣」も織女が牽牛のために織るものである。

最後の一首は、秋雑歌に収められていて、背子の着ている衣が白いから色づくだろうと想像した内容である。万葉集で白色が、或は白い衣が夏を意識させる例も指摘できない。恋する心を白い衣に託して表現することがあっても、白い衣が夏の季節とは直接結びつかない。とすれば、香具山の歌は、何が「春過ぎて夏来るらし」とうたわせたのであ

うか。

これ迄の考察から確認した内容は、「白妙の衣乾したり天の香具山」が生活に基づくような写実の景にならないこと、白妙の衣を乾すことが女性の愛情を示すもので夏の景に限定されないこと、そして、香具山の歌が春から夏の到来という季節を配慮すべきことである。

四、白妙の衣

さて、「山の白い物は何か」という問いとそれを契機とする想を考えると、古今集の仮名序に興味ある記述が見出される。

秋の夕、龍田川に流るる紅葉をば帝の御目に錦と見たまひ、春の朝、吉野の山の桜は人麻呂が心には雲かとのみなむ覚えける。

ここに記されているのは、見立ての技法であり、「紅葉の錦」と「桜花の雲」とでもいうべき組合せである。この見立ての組み合せを、「雪」と「白妙の衣」にすれば、季節感が失われてしまう。そこで「春の……」と「白妙の衣」、また「夏の……」と「白妙の衣」という春と夏との二のものが配慮されるべきである。即ち、「……の白妙の衣」が春と夏の季節をそれぞれ表現した組合せを考えると

いうことである。

ちなみに万葉集にうたわれた桜の名所に香具山があった。もちろん桜は春を代表する花であり、桜児伝説にもなる美しい花の代表でもある。鴨君足人の香具山歌（三・二五七）に「天降りつく 天の香具山（中略）桜花 木の晩茂に」とあって、桜がうたわれている。また桜をうたうものには、「あしひきの山さへ光り咲く花」（三・四七七）や「あしひきの山の間照らす桜花」（十・一八六四）などともあって、明るく花咲く姿が山を輝やかせている。ここに到れば、「桜花の白妙の衣」という見立てが考るえられてよいことになる。

一方夏の山を色どる白花としては、橘と卯の花があった。卯の花も花橘も共に初夏をかざる花である。橘を詠む歌の特徴として、「わが屋前の花橘」（八・一四七八等）とあるなど里に清く薫り咲くのがうたわれている。ところが卯の花は、

五月山卯の花月夜雀公鳥聞けども飽かずまた鳴かぬかも（十・一九五三）

かくばかり雨の降らくに雀公鳥卯の花山になほか鳴くらむ（十・一九六三）

などらに「五月山卯の花」「卯の花山」とあって、山に咲

く卯の花がうたわれている。夏山を色どる白花は、橘よりむしろ卯の花が適当になる。従って、白く輝かせて香具山に咲いている初夏を代表する卯の花を白妙の衣に見たてることが、充分考えられてよいのであるまいか。「卯の花の白妙の衣」という見立てが考えられれば、それは春の桜花の白妙衣と対応することになる。

東歌の三三五一番では、上句に「筑波嶺に雪」とあり、下句に「布乾さる」とあった。雪と布の比較では、布に季節の趣がないのであるから、何故に「春過ぎて夏来る」という丁寧なことをいうのか、説明しにくくなる。そもそもは「春来たるらし」（八三四）、「春になるらし」（一八四五）、「春立つらし」（二八二）などが、「らし」を用いた香具山の歌に類型するもので用いられているにもかかわらず、持統歌が二句も用いて、あたりまえのことをわざわざ丁寧ない方をするのは、それが桜も終わり、そして卯の花の咲く季節になったことの配慮であろう。春ではなく夏なのだというのは、香具山に季節を感じさせるものが特別に存在していなければ誕生しない表現であろう。春山と夏山の対照が明確に意識することの出来ること、なお白色で色彩が統一されること、この二つの条件に適應できるのは、花を衣に見立てる技法を考えざるを得ない。

香具山の白い物は何かという問い、それを契機とした春の桜花の白妙衣ではなく、夏の卯の花の白妙衣とする二組の見立てで一首が作られた。持統天皇の香具山歌とは、そんな歌なのであるまいか。

そこで確認したい問題がある。それは、「卯の花衣」を乾すという発想がどうして生まれたのか、また衣を乾す場所が何故に香具山であるのか、ということである。

舒明天皇の「香具山に登りて国を望たまふ時の御製歌」(二)と題する歌があり、香具山が五穀の繁栄を祈る「国見」の行われた特別の聖地であった。この祭式が行われたことも重要であるが、考慮すべきは天智天皇の三山歌であるう。

香具山は 畝火ををしと 耳梨と 相あらそひき 神
代より かくにあるらし 古昔も 然にあれこそ う
つせみも 婦を あらそふらしき (一・一三)

三山歌の解釈には諸説があつて香具山が男性であるとの意見もある。⁽⁸⁾しかし、ここではその当否を別にして、二男一女の恋物語と考え、香具山を女性と考えたいし、そう判断すべきだろう。というのは、「白妙の衣乾したり天の香具山」という発想は、女性の愛情を示すもので、香具山に愛しい女の連想がありそうである。そもそも衣を乾す歌

で、乾す場所が問われるものがない。問われるのは、衣を乾す行為が女性の愛情を示すことであり、そこに男性が愛しさを感じているのである。持統天皇の香具山歌が山を衣の乾された場所としてのみ考えるのは、不十分である。香具山に女性が寓意されているのである。

即ち、愛しい女性が香具山でもあるから、山の白いものは何かと問い、卯の花を白い衣に見立てる発想から「白妙の衣乾したり」という表現が生まれることになる。香具山に寓意を考えれば、「白妙の衣乾したり天の香具山」という発想と表現がますます必然的な内容になってくる。

香具山には、初夏を飾る卯の花が咲いてる。それを見た持統天皇は、春の桜が終わり、もう夏が訪れ来ったことを知る。そして、女性が愛しい人を思つて白い衣を乾している姿に見立てる。香具山では、春の桜衣が夏の卯の花に衣更しているではないか、と。

結 び

香具山の歌は、純粹な季節歌と見做して理解する限り、特異な素材で季節感を表現していて類想歌を見出せない内容がある。春から夏の到来をうたうこと、白妙の衣を乾すことから夏を表していること等である。

しかし、白い衣を乾すことが夏の日常生活の反映である、香具山に衣を乾すことがある、またその景を藤原の宮から望み見れる、といったことは写実にこだわり、論証に欠ける。一方、内容が特殊で写実的な描写に疑問があるからといって、この歌に含み込まれた季節感とは全面的に否定できない。四時思想を踏まえている、或は冬の雪と白い衣の連想が働いた、という指摘は貴重であっても、やはり季節感を踏まえていない点に疑問が残る。

そこで、万葉集で衣を乾す描写が女性の愛情を表わしているのに、どうして夏の季節が導き出されるのかを考察した。「白妙の衣」も白い色も共に夏に限定できないし、特に季節に結びつくものでもない。ところが、古今集の仮名序に、「吉野の山の桜は人磨が心には雲か」とあって、「桜の雲」の見立てが記されていた。そこで考えられたのは、山に咲く花を白い衣に見立てることである。そして、見立が認められれば、持統天皇が季節感に基づくものとして理解できることになる。

万葉集では、香具山が桜の名所になっている。「桜の雲」が「桜の白妙」としても充分考えられる。夏に卯の花が咲けば、そこに当然春山の桜と夏山の卯の花という対照も生まれる。春の「桜の白妙衣」が夏の「卯の花の白妙衣」に

推移する。しかも、香具山が女性に譬えられているのであるから、衣を乾すという発想が自然なものになる。持統天皇御製の一首は見立と寓意に基づく発想で創作された、と理解したい。

注

- 1、大浜氏「歌の意匠」(『万葉幻視考』第三部第二章所収) 一七六～一八〇頁。
中西博士「話者としての持統」(『美夫君志』昭和五七年三月)

- 2、『万葉集全注巻第一』一一九～一二四頁。
- 3、『折口信夫全集第九巻』三二八～三三四頁。
- 4、『持統天皇』(『万葉集講座第五巻』(有精堂) 二二三頁。
- 5、注1大浜氏に同じ。
- 6、『万葉幻視考』解説 三二〇頁。
- 7、注1中西博士に同じ。
- 8、近代の注釈書では、『講義』『全注釈』『私注』『古典文学全集』『新潮古典集成』『全注』等が香具山を男性と解している。

(本学助教授)